

2002.3

No.29

北海道登別発 ふるさと通信

# 湯かげん

重要湿地

特

集

『キウシト湿原』

◀ キウシト湿原に咲くヨツバヒヨドリとクジャクチョウ（尾崎保さん撮影）



◀ミツガシワ



▼キウシト湿原に咲くミスバショウ



▲ミスゴケが堆積してできたブルテ



▲キウシト湿原(写真提供:北海道新聞社)

# 重要湿地 キウシト湿原

若山町にある小さな湿原『キウシト湿原』が、昨年、環境省から『重要湿地』に選定されました。かつて北海道で多く見られた湿原。しかし、今では、開発や都市化の影響を受け、その数は激減しています。登別市に唯一残され、希少な野生生物が息づく貴重な湿原『キウシト湿原』を紹介します。

見落ととしてしまいたいような  
小さな緑地

登別市の西の端・美園町から道道上登別室蘭線沿いに幌別方面へ向かうと、若草・新生・富岸町の街並みが見えてきます。かつてこの一帯は、『谷地』と呼ばれる湿地帯。軟弱地盤のため家がほとんど建っていませんでした。

昔は1戸の農家もなく、スズランやミスバシヨウの群生地として知られ、大正10年ころには、スズラン狩りに、当時の国鉄が臨時列車を出したと市史に記されています。

この地域は、昭和48年から始まった市の区画整理事業により住宅街が形成され、片側2車線に整備された道道沿いには、大型店をはじめさまざまな商店などが建ち並び、その姿容ぶりは、往時を知る人々を驚かせています。

富岸町を過ぎて高低な丘を越えると、バスの車庫や菓子工場の裏手に小さな緑地が見えてきます。急いでいるとつい見落としてしまいがちなこの小さな緑地が、昨年環境省から『日本の重要湿地50』に選定された『キウシト湿原』(※1)です。

※1:キウシト  
「カヤ・群生する・走り根」を意味するアイヌ語『キ・ウ・シト(Kiw-shit)』が由来。(室蘭・登別のアイヌ語地名

其の一『幌別町のアイヌ語地名』知里真志保・山田秀三共著、1979年噴火湾社刊より)

## この湿原が 貴重な理由

湿原の定義をひもとくと「多湿・低温の土壌に発達した草原、動植物の枯死体の分解が阻止されるため、地表に泥炭が堆積している。構成植物・生態条件などにより低層・中間・高層湿原などに区分。やち、」(広辞苑)とあります。

『湿原』という言葉から広大な草原を想像しがちですが、このキウシト湿原は、住宅街や道路に囲まれ、広さはわずか約4haです。

低層湿原(※2)に分類されるキウシト湿原内には、周辺の丘陵部から供給される富栄養な水の影響を受けヨシやスゲが成育しています。

ところが、湿原内には雨水だけが供給される貧栄養な区域があり、高さ30〜40cmほどのワラミスゴケ(※3)でつくるブルテ(※4)が点在しています。このブルテは、通常、高層湿原で見られるもの。

このように、低層湿原内にブルテがある湿原は、非常に特殊といわれています。

このタイプの湿原は、かつて十勝地方から勇払地方にかけて広く分布していましたが、その多くが農地開

発や都市化によって失われてしまいました。そのため、このキウシト湿原は、大変貴重な存在といわれています。

※2:低層・高層湿原  
低層湿原は、周囲よりも低いいため、栄養を多く含んでいる河川水や沢水などが流入し、ヨシやスゲが群生をつくる。高層湿原は、泥炭の堆積が進んで周辺よりも高くなるため、主として栄養をほとんど含まない雨水によって涵養されるミスゴケが群落を作り、全体がドーム状に盛り上がる。

※3:ワラミスゴケ  
雨水や霧によって成育するミスゴケの一種

※4:ブルテ  
ミスゴケの遺体が堆積してできた小丘(ハンモック)。通常マンジュウ型に盛り上がる。

## 3千年の歴史が育んだ 湿原の水生动物

このキウシト湿原が生まれたとされるのは、今から約3千年前。気候の寒冷化によって海岸線が海寄りに後退し、海沿いに沼ができた時代でした。

ボーリング調査による花粉の分析結果では、沼から湿原へと長い時間をかけて変化したことが明らかになっています。

この湿原は、栄養の少ない地下水

や雨水によって涵養され、栄養条件の乏しい環境でも生息できる、特異性のある植物の存在が大きな特徴です。



堀本 宏さん

この湿原を調査して『キウシト湿原調査報告書』を作成した市民グループ『ふるさと自然情報局』の代表・堀本宏さんは、「『トンギョ』と呼ばれ、昔は数多くいたイバラトミヨは、今や減少が進んで風前の灯ですが、この湿原ではまだ確認できます。懐かしいゲンゴロウやミズカマキリもいます。北海道のレッドリストに



▲エゾホトケドジョウ



▲イバラトミヨ



▲ミズカマキリ



▲ゲンゴロウモドキ

載っているエゾホトケドジョウも少ないですが確認しています」と水生動物の調査結果を話しながら「この湿原は春から夏、秋にかけてさまざまな花が開花します。湿原を訪れるたびに違う花に出会えるので行くのが楽しみです」と湿原ファンを自称しています。

**湿原を彩る希少植物**



尾崎 保さん

室蘭市の植物研究者・尾崎保さんは、同じくふるさと自然情報局の会員です。「ここにミズバショウの群

落が残っていたと聞き驚きましたね」と湿原の第一印象を。

「登別は、海が近く山もあり川も多い。きつとめずらしい植物があるだろうと以前から興味がありました」と話す尾崎さんは、平成9年からキウシト湿原の植物調査を始めています。

「花が咲き始めるのが4月下旬。コブシやミズバショウから始まり、秋にかけてさまざまな花が咲きます。環境省のレッドデータブックに載っているオオバタツボスミレの花が5月下旬、6月下旬には同じくホソバナシバナが開花します」と、この湿原の貴重な植生を話します。

夏になると食虫植物のコタヌキモやモウセンゴケが咲き、また、この湿原の特徴であるブルテの上部にはツルコケモモがピンク色の花を咲かせ、そして赤い実をつけます。ふるさと自然情報局がまとめた植物調査で、レッドデータ種を含む約20種（外来植物24種を含む）の植物の存在が報告されています。

「周辺地域にはない植物がこの湿原では確認できます。ところがガーデンングームのせい、この湿原の大切なミズゴケを持ち帰る人が多いようです。また、ほんの数株しかなかったウメバチソウも盗掘されてしまいました」と困惑の表情で話す尾崎さん。



伴野 美江さん

は、オオハンゴンソウやオオアワダチソウなどの外来種が年々増え、悪影響を及ぼしていることです。「もともと湿原に咲いています。ずいぶん植物を駆逐しています」と湿原植物の将来を心配しています。

**湿原に飛来する野鳥たち**

ふるさと自然情報局の会員として、主に湿原に飛来する野鳥の生息を調査している伴野美江さん。

伴野さんが一番に挙げる鳥は、環境省のレッドデータブックに載っているオオジシギ。オーストラリアから太平洋を渡り、1万キロ以上の旅をして来るといわれるオオジシギは体長約30cmの中型の鳥です。「4月中旬から9月ごろまで湿原でヒナを育て、秋に南へと向かいます。この貴重な鳥が湿原で繁殖しているんですよ」。



▲オオバタツボスミレ



▲ホソバナシバナ



▲キキヤバタ



▼初夏のキウシト湿原



▲モウセンゴケ(食虫植物)に捕まったトンボ



▲コタヌキモ(食虫植物)



▲ツルコケモモ

そのほか、北海道のレッドデータ種に指定されているクイナをはじめ、コケラやアカゲラ、エナガなど44種類のさまざまな鳥が確認されています。

**災害対策の実施と湿原の変化**

約40年にわたり湿原付近に住み、湿原の変化を見続けてきた市民がいます。

この湿原のすぐ近く、通称あかしや団地に昭和38年から住んでいる藤井昭三さんは「住み始めたころは、湿原と言わず『裏の谷地』と家族で呼んでいました。私の子どもたちは谷地からトンギョを捕ってきて水槽で飼ったり、オタマジヤクシをパッケージですくったり、エゾサンショウウオの卵を取ったり、クワガタムシを捕まえたりしてましたね。めずらしい食虫植物の観察ができ、夏にはホタルも飛び交うこの谷地は、子どもにとって最高の遊び場でした」と昭和40年代のころを懐かしそうに思い出します。

キジバトやエゾセンニユウ、カッコウの鳴き声で目を覚ますという素晴らしい環境に住む藤井さん一家の悩みの種は水害でした。大雨のたびに何度も床上浸水に見舞われ「妻が子どもを背負ってポトで避難したこともありましたね」。



藤井 昭三さん

昭和39年の水害が特にひどかったので、周辺の住民約40戸で町内会を結成して、市に水害対策などを要望しました」と藤井さん。

「市が河川改修を行ってくれて、ここ20年はようやく水害とは無縁の生活を送ることができるようになりました。近所の方たちも喜んでいて」とほっとした表情で話します。

その一方で、藤井さんの新たな心配ごととは、目の前にある湿原が年々変化してきていることです。

「水害の心配がなくなつてから、少しずつ湿原の様子以前とは変わってきていますね。地域住民として少しシレンマを感じています」。

地域住民の強い要望で行われた災害対策が、湿原にとっては、マイナスイ効果を与えたのかもしれないと藤井さんは考えています。

**年々悪化している重要湿地の環境**

昨年、環境省の重要湿地に選定されたキウシト湿原。この貴重な動物の生息が確認されている湿原を取



▲キウシト湿原の冬景色



▲市民会議「キウシト湿原を考える会」



▲キウシト湿原写真パネル展

▼サワギキョウ



▲オオジシギ



▶オオヨシキリ

▼秋のキウシト湿原



▶コゲラ



▶アカゲラ

り巻く環境は年々厳しい状況になってきています。  
昭和50年代には、キウシト湿原のすぐ北側を走る道が整備され、数年後さらに北を高速道路が開通、湿原への水の供給システムに変化が生じました。  
開発が進み、周辺地区の市街化に伴って、周囲から汚染された水が流れ込むことで、ミスゴケの生息地が一部に限定されてしまい、また、年々湿原の孤立化や乾燥化が進んでいます。  
都市基盤整備は、私たち人間の生活環境を快適にしてくれますが、湿原にとっては、逆に環境が悪化しているといえるのかもしれない。

ふるさと自然情報局の会員は、この貴重な湿原を保全するように市に働きかけたら、すぐに動いてくれた『キウシト湿原を考える会』を結成して、保全方法を市民と行政が一緒に考えている。自然と共生するまちづくりを進める市の姿勢には好感がもてます」と市が描く将来像、すなわち、この湿原を自然公園化し、保全や活用をしていきたいという姿勢を、異口同音に評価しています。  
しかし「湿原で野鳥などの調査を始めてもう5年になりました。以前には聞こえたツツドリやオオヨシキリの鳴き声が最近聞こえなくなりました。野鳥にとっては、ある一定規模のヨシ原が必要です。ゴミも増え

### デリケートな湿原に山積する課題

湿原保全の検討を担当している市の建設都市計画課の船田直也さんは「この湿原には、約80人も土地所有者がいます。また整備方針を検討している段階ですが、まず土地所有者の方の理解を得ることが第一。また、整備には数億円とも言われる多額の税金を投入するわけですから、当然市民の理解も必要になってきます」と話します。登別市も全国のほとんどの自治体同様財政難に直面しているなど、湿原の整備にはたくさんの課題があります。



船田 直也さん

市の都市計画課では、市民を対象に湿原の観察会を年に数回開いたり、

湿原の動植物などの写真パネル展を開催するなど、貴重な湿原に対して市民の関心を高めてもらうさまざまな試みが続いています。  
「初めて湿原に足を踏み入れたときの感触は忘れられないですね。足がスツツと沈んでいくような、これが湿原なんだなって思いました。ミズカマキリが何気なく泳いでいる、そんな情景は、市民の一人として大切にしたいと強く感じています」と話す船田さんが特に気にしているのが湿原の乾燥化。  
「年々乾燥化が進み、植生が壊れてきていますので、ワラミスゴケなどを保護する栄養分の水の供給の維持が必要です。専門家の力を借りながら、流し込む位置や水量計算などの検討をしなければいけません。」  
かつてたびたび水害の被害を受けたあかびや団地が下流にあるため、調整が難しいですね」と船田さんは緊張した表情で話しています。

### 湿原の保全と湿原の利活用

市民約40人が参加している『キウシト湿原を考える会』の中には、湿原内に木道を設置して、小・中学生の自然学習をはじめ、市民が観察しやすいように整備すべきという意見や、人が入ると湿原に悪影響を及ぼすので、周りを囲い、立ち入り禁止



▲シオカラトンボ

にしてしっかりと保全すべきなどさまざまな意見があります。  
堀本さんは「湿原が比較的良好な形で残っている部分は、野鳥が繁殖している可能性が高いので、立ち入りを制限して保全すべき。少し壊れてしまった部分は、市民の手で楽しみながら復元作業をする。完全に壊れてしまったスペースは学習や憩いの場、作り直す場とするのがいいと思います。もちろん線引きというかゾーニングをするには、きちっとした調査が必要ですね。いずれにしてもかなりのお金がかかることですから、これからのいろいろ大変になりますね」と湿原の保護や活用を提案しながらも、多くの高いハードルがあることを認めています。

### キウシト湿原を未永く残すために

かつて登別市と海と山の間一帯に広がっていた湿原。昔から慣れ親しんできたふるさとの風景が少なくなってきた今、キウシト湿原は登別の数少ない原風景の一つです。  
時代の流れに乗り、日々発展し変化していく地域がまちには必要ですが、その反対に、いつ見ても変わらず、懐かしさや郷愁、そしてやすらぎを感じる場所もまたまちには必要です。  
住宅地に囲まれた小さくデリケー

トな湿原。この貴重な自然環境を残そうとする市と市民の試みは、まだ始まったばかりです。  
もしもキウシト湿原の保全や復元が成功し、市民の学習や憩いの場になったなら、これまでにないまちづくりのモデルケースとして、全国から、いや世界から注目されるかも知れません。

#### ※写真提供

- 水生動物・昆虫：堀本宏さん
- 植物：尾崎保さん
- 野鳥・冬景色：伴野俊夫さん

キウシト湿原に関するお問い合わせ  
～都市計画課～  
☎0143-85-4115

# ホームページ@ふるさと

## Noboribetsu

### 愛称は『ふおれすと鉱山』に

～ネイチャーセンター完成～



森や川など素晴らしい自然に囲まれた鉱山町に、人と自然のふれあい拠点施設『ネイチャーセンター』が3月末に完成しました。

市民の憩いの場や青少年の自然環境教育などに活用することを目

的に、約3億5千万円をかけて整備したこの施設の愛称は、公募により『ふおれすと鉱山』に決定。

鉄筋コンクリート平屋約1,468平方メートルに、8人用洋室8室や和室2室、障害をもつ方が利用できる宿泊室(2人用・1室)のほか、ネイチャーホールや調理実習室、浴室などを備え、4月下旬にオープンする予定です。

▼問い合わせ 社会教育課 (☎0143-211129)



## のほりべつ

### 気軽にITの体験を

～地域情報センターオープン～



平成13年11月3日(土)、登別中央ショッピングセンター・アークス2階に『登別市地域情報センター』(愛称:PiP)がオープン。

このセンターは、パソコンなどの情報機器や各種映像装置、関係書籍が用意され、子どもからお年寄りまで気軽に情報通信技術に触れることができる施設で、オープンから4カ月で、延べ約7,000の方に利用されています。

また、高度情報通信社会に対応するため、市が平成12年度から整備を進めてきた市内の小・中学校や市役所などの公共施設、商工会議所、日本工学院など37施設を結ぶ光ファイバーネットワークの工事も終了し、高速ネットワークが稼働しています。

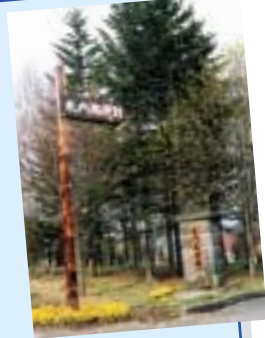
そのほか、市のホームページでは、市立図書館の蔵書検索や予約、市議会議事録や市例規集の検索もできるようになりました。

▼問い合わせ 情報推進課(情報政策) (☎0143-5109)

## のほりべつ

### バターづくりなどが体験できます

～札内高原館～



札内高原館は、閉校となった札内小中学校校舎を改修して、平成12年4月にオープン。太平洋や山並み、草原など素晴らしい眺望の札内町で、市内で生産される農畜産物を利用したソーセージやチーズ、アイスクリームなどの製品づくりを目指した加工研究を進めています。

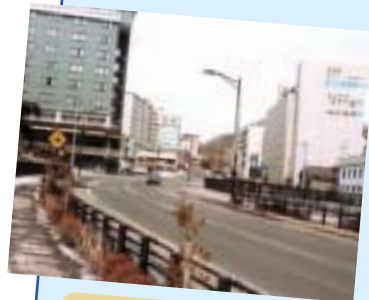
ソーセージやバターづくりが体験できるほか、札内町の歴史をつづる資料室などが見学できます。ぜひ一度お越しください。

▼問い合わせ 札内高原館 (☎0143-3184)

## Noboribetsu

### 1期工事の820メートルが開通

～登別温泉バイパス工事～



室蘭土木現業所が登別温泉町で進めている道道倶多楽湖公園線のバイパス工事の1期工事分約820メートルが昨年3月末で終了し供用されています。

このバイパスは、温泉街を通り抜ける同道道の通称『極楽通り』の渋滞緩和と緊急時の避難路確保などを目的に、平成3年度から約100億円をかけて事業を進めていたものです。

1期工事は、登別厚生年金病院前と『ホテルまほろば』前を結び、道路幅は、車・歩道を合わせ17メートル。

2期工事は、第一滝本館前までの約365メートルで、早ければ平成20年に開通する予定です。

▼問い合わせ 管理課 (☎0143-3230)



北海道登別発 ふるさと通信

湯かげん

2002.3 No.29

発行・編集/登別市総務部情報推進課(広報広聴)

☎059-8701 北海道登別市中央町6丁目11番地

☎0143-2111 FAX0143-1108

●ホームページ <http://www.city.noboribetsu.hokkaido.jp>

●Eメール [pr@city.noboribetsu.hokkaido.jp](mailto:pr@city.noboribetsu.hokkaido.jp)